



源氏辨了抄

七



九
陽
宮
庫



賢本

祠と寺といふ名と守源氏世二歳の九月より世
正家のままたつゆと申すなり

大殿の君もよせ給ひて後よりともや世人もま
あつひま乃肉ももんと記せしむ

葵上よせ給へいふと亦乃源氏の中臺より給ん

と人よりまや車あつひの遠恨いすいふと亦

のの理極くあまりの理もすいふと亦あり給ふ

い却るより一いふと亦いふもあれらるすいふと亦

会方と世人もよせ給ひて源氏に在り隔心也其の

仇と執とらは仇をとすればよし仇はたむと妻上の権一
 威いは慕あこがはよ天道の驕おごりとくむし打うつるせまを
 所ところのよ不義ふぎをちりぞけなくくひの世よの人ひとを
 べーとさひのよめ堪た忍へ一筋しりやぶひのよ
 又昔むかしより悪あくきとくも大おほきうにうりやうあま
 車くるまのよひとせむ人ひとをたのまひてを思おもひ
 て出でたよちりーとゆらんきよ多おほ勢せよきーうひ
 かりとゆらんきとさひ流ながよとを思おもひ流ながき敷しまぬれ
 ー世よの上うへのよとくや
 おまひてくらう流ながよ例れいもはよふひま

母はは宮みや女むすめ御ご漱しゆ子こ

式部卿重明親王女 母貞信公ノ女

六十一代朱あか花な院いん

承平六年為な母はは文ふみ婦むすめ宗むね後のち六十二代村上天曆二
 年十二月入い肉にく同どう之年のとし二月ふたつき為な女むすめ御ご生せい規き子女こども王わう
 六十四代圓えん融ゆう院いん天延三年規き子女こども王わう為な母はは文ふみ宗むね
 入い伊い勢せい之の時とき母はは女むすめ御ご漱しゆ子こ被おほ相あひ具ぐけ例れい延えん表へい以後ご
 近代しんたいのよりなれ例れいももとといいたたるるれれどどうう子こ歎なげけけ後ご
 今いま古ふる准のり持もちううききゆゆいいののせせががらら也や

拾遺八条融院村とせ水みづ時とき母はは宮みや女むすめ御ご漱しゆ子こ
 母ははの前まへ母はは文ふみ宗むねのの子ことといいふふゆゆりりて 母はは文ふみ宗むね
 世よののああれれををああししりり珍めづ廉れん山さん昔むかしのの今いまににままははああららん

一花堂云桐壺帝と近長よはと近長の前と例るに
との致くしにの珠又別の字也

いでやとわがわづらひさう
川分神祇とて面直

我とのこころとてはるべきとてやんかかぬさして

松風まじく吹わたせし

野宮よ汝交乃度申しゆりよ松風入夜琴

并松遠八詠上

この音の響乃松風がよらうられのとりとるん

汝交女御野交はての音るれん海べし

け女流仁明天皇乃御子也

かろぬ色ととるべしとて
源氏の林のこころかろ

ぬとや

ふとやち新垣山の林義の時南よとるもかろりざりたり

お八度とげとがぬ林紫の林のみまは御りあひさう

いづきもあえゆりよとれ
百紫挿中入磨牙よ

河拾遺才たあや

あもやち新のいれもあぬへし今我身代りむね

け下向大主人の足まくりとすれい伊勢地経

の音や喜花よと大主人の足まくりとすれい

あろくし

新垣いさりの枝もたれめとたれまへてかき添木

枝のむべきとちりのんき為給べきとちりもたれよ

つれづれにたぐて為ゆふごと恨りくや

可古今部下 我庵の之痛の山りと恋くともうしむせ枝とそ

古今をよ 之痛の山に結みん年が氏恐る人もありと

不審抄出よ紙庵乃身之痛明神の由身く

末通女子つほりくと之の榊紫乃香とあり

ほ送下 榊紫乃香とかくびとあられ八十氏人を

け何えよあり末通女の袂夏ようじよ童女や交

とふのあふりと之の夜いまげと榊の

香とこめてお

あらさひあつめ結んちつと

實枝云あらの多のゆきと

かよ一川息雨の恨も消ぬへきと

無限心中不平事 一宵清話又感室 三舞詩李涉

殿上のよろきんざら 細 夢巻よ殿上人れも

の露かありくと之のやまなんすと

めゆくえ乃うにとまに作出と

九月の比あうとついで氏れ尋らに明の糸

氣あひよあひくらさ後結つくり出

三秋未晚之候 五夜待明之天 別緒依

之情 虫聲切々之恨 遭逢斯時 思乱々恋

何らまの^れか^いつと^も落^され^とあ^らん^ぬ秋^の免^れ

^花曉^のな^らむ^ゆい^白露^のに^はて^て僅^しき^別せ^や

大底^下時^心想^若 就^中腸^断是^秋天^秋興^樂天

何んくーいん^れ名^との^いが^して

ま^とお^んと^好ま^しら^うー^め好^まと^さら^り万^事人

子^めけ^出さ^ら男^子好^まし^られ^大多^り痴^也

抱^朴子^曰目^之所^好不^可從^也耳^之所^樂不^可不

慎^也口^之所^嗜不^可隨^也心^之所^欲不^可恣^也惑

自^者必^逸容^鮮藻^也惑^耳者^必奸^音淫^聲也^惑口

者^必珍^饈嘉^肴也^惑心^者必^勢利^功名^也奸^淫也

世人^の例^を記^して^いふ^き 醍醐^{天皇}御^事云^いハ^詠宮

子^親多^して^下流^の例^ハ一^レれ^れ好^まし^らん^と

下^りて^下流^の子^ハ外^也も^空然^も懐^きし^と

何^とも^いふ^と 天^原少^彥尊^の鳴^神も^天原^とい^ふ所^也

や^まり^らう^まつ^らう^と

神代^卷上^八枚^云伊^弉諾^尊伊^弉册^尊共^議曰^吾

已^生大^八洲^國及^山川^草木^何不^生天^下之^主者

歟^於是^共生^日神^號大^日靈^貴云

八洲^ハ日^本ノ^一名^也地^祇ト^天照^太神^ニ齊^宮ヲ^比メ^也

八洲^ハ日^本ノ^一名^也地^祇ト^天照^太神^ニ齊^宮ヲ^比メ^也

とくうーたにたつとどらうのゆれをせよ

源氏のゆくせよてまりりくくワリをたゆとあのこと
行よとてあまに今んとうつせり想よてよ下万
人たよ人のあひより順義またたひいて皆ひごと
然すいれらるるよこのむと飛てまよりけせよ
せらよりんやんぬぐりその嬰子のふれやうよ母く
くくせよあゆよまくれとまげき泣や直君の賢臣
の諫をきくひ私の非をこのあつ只人へのあま
の眉目貌らまことせせとて悪醜なれ他
女とせと皆を知らくく義をまむくゆとま

の災とるりよとがくアと流てきよん

十六よて故まよ海つり流て二十よてまをくれまう流ひ三
十よてぞうよ又九をまをん流ひらる

十六よて故せん坊よまより十七よてけあまとうみ
せよて前坊よとあれ流よ時源氏君十二歳之朱雀
院の立坊へ源氏四葉の耐えをれりま此の春宮よ
てまーませい前坊とんやや

不審抄出云ふも今三十まれのあまへ十は源
氏に廿こく朱雀院立坊へ今十九年よるる故せん坊
乃立坊より昔のゆと流を今十六よて故まよ

あるとよりより大にお毒せり花多は石齋とに
てく藤原一治守所詮作扱候されいかやうの所
穿鑿すべし

表よりけとすくく人治了すくくかす

由交和の奇を伴判一治へり熱くは治り又孝

はそそ人のんあそそめの人離あ乃の衣人

毎子何りなりしるりとさひ切らなけあき作

也多と承の万たりひくく人の又すだれてんづ

くむさき承あつはけすに志くれり

より川ののりあしとせ候へど

ふ歳の喜文へ由遺言也

李部王記曰延喜帝取後御藥之間春宮朱雀院 七

歳御時御舅貞信公于時左大臣 為御供御参内主上

御對面之間有五ヶ条之仰一者可專神事二者

可仕法皇寛平 三者可聞左大臣訓四者可哀古人

其外一ヶ条御忘却春宮御退出之時左大臣被

奉問之

李部王記六十六代延喜帝ノ皇子式部卿重明ノ親

王ノ御記也吏部トモ書ナリ法式ヲ司ル者ヲ吏ト云

行吏行率ノ字ヲ通用ニ音同キ故也左傳ノ正義ニ

見タリ

位カガとカガせカガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
づカガめカガせカガ

細カガ脱カガ纏カガ以後カガ政カガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
脱カガ履カガとカガ帝カガ位カガとカガ志カガ院カガ帝カガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ

各自抄カガまたカガつカガとカガ付カガり

みカガどカガいカガとカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
かカガらカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
敵カガとカガ人カガみカガまカガしカガひカガあカガげカガ

韓カガ子曰カガ袁カガ舜カガ生カガ在カガとカガ雖カガ有カガ十カガ桀カガ紂カガ不カガ能カガ亂カガ者カガ勢カガ也カガ

也カガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
政カガたカガらカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
いカガ賢カガ臣カガとカガ用カガてカガしカガ政カガもカガ明カガらカガつカガにカガ賢カガとカガ用カガてカガしカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
とカガらカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
これカガいカガ文カガ王カガ之カガ朝カガ多カガ賢カガ良カガ秦カガ王カガ之カガ庭カガ多カガ不カガ祥カガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
詩カガ經カガにカガもカガ襄カガ周カガとカガ君カガたカガらカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
打カガちカガまカガせカガてカガしカガ世カガもカガ明カガらカガつカガにカガ賢カガとカガ用カガてカガしカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
きカガらカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
いカガ天カガ下カガのカガまカガげカガきカガらカガつカガらカガつカガまカガ守カガ祖カガ父カガかカガらカガつカガとカガ志カガ後カガとカガつカガりカガにカガをカガ何カガれカガ世カガのカガ政カガとカガ志カガ
詩カガ政カガ恐カガ於カガ虎カガとカガ

之り君の爲に賢とすめ不肖人と云うがけ忠
何うも人費とあつくり言とすむる徳の
云んす下とあぐえ法とほくく一氏の罪あり
しつそとよ罪何れも慈悲乃れあれ罰とかりく
しつそとよ下大車方氏女徳まれ

少づの内がよやけき 師云 是の藤の皮よ織らる

布やあべて云氏の衣服ありしを古今哀傷
那は忠孝が奇よ

教衣をいりてあは俺人の涙の玉乃緒とを感
けう又の喪よあらしは後ハ喪服のよよ

定まりし也河海は襖衣服者の忌むる物と云く
父の喪の衣服と斬襖とよ斬ハ姐滅切。襖ハ推也
喪襖也。布の糸筋の教あつくしきと云母喪服
齋襖とよ齋ハ衣下の裳也

らりくよあしで流す
七糸衣くれ流し一は後伊勢が長奇よ

古今 秋の紅葉と 人いよのからりく、さうれあぶ
たの心陰まぐ、さうとてく 上下男

内えよさる池乃鏡のまけきに足洲ハげとぬそ
大和物語は式部卿ま乃亭子流し恒流いよたり

けまうせ流して後よ愈盛け流とんて池の白白
く表るるをどうあらうよ

池に花青あがりの後よて新みや君が流を流き

古今十六諒園乃年池のけりりの苑とんてよ

めら
管網

水面よまつく花乃をさるにも君がみげのわもかゆが

けすの面けありて面白く又池と鏡といふ

粧閣妓樓何寂靜 柳似舞腰池似鏡 白氏文集

たらこみくろり馬車うすくぎ

門前零落鞍馬稀 琵琶行

みくろげの 御匣筒殿へ兵服と裁縫所也

右大臣の六君彫目衣葵巻よ朱雀院へまのりけり

よなれり

物の穿をもあふべいあんとわがりあがら例のぬをせ

弘徽殿大臣のけりり源氏のぬをよ悪

外あれりと念どけふも母桐壺の衣の時めは

流ひく娘取のあさりや今大臣の世子ありて

源氏のぬをすつていひてい大臣の時え

とぬえ悟へまあがら好まよけいひりる流き

このこ流よくせるればらあきとんせひあがら

月夜子密通の自業自債果之雀が蝗蝦とらん
として人の雀を移しぬと云うざるや源氏も
朧月夜子を入て大匠の福しひ治すと云うざるや
されば仏教も色慾香味觸のみ欲の中にも色欲
と第一とと輪廻の業も是より起る。色ハ熱鐵丸と
親をべーと云う

故院乃代もいふが由、子からせしを時うつて

桐壺帝の延長代もいしころ在る位に東宮の代
外祖又みれせんせつらとや、輔依の位乃器
剛多きゆへに位と用治つりゆれせん天道十威

すれが必裏りゆへ朱雀の代い方うつりるせり
在来治てい又改めつら世とせらりまにあり
てい年のつらりとあるがごとし

むしにやぶれわりは海などいほま何れがごとし

桐壺帝の代もかぎり源氏の君時とていひ治す
い世の盛者必裏のる理とていふれせんい治るねと
いんあういころころつられおかすい海もある

ありむらもころつらきいんあきとる名の時い人あ
せようつて法度行を政かこあられど又つらき

にきて和らぬまなむ慈仁のゆきゆへに不肖
の長堪ぐく一和らぐく又礼義たぐくくればよ
下安泰く

五壇御修法

かごととむ名目や五大尊の

壇みあり

あさつ子んまら人だまあね

任務の海人の御まきまらぐくよみらぬ人あへん

ありりあらくくであん

離月東のんからくく又ま子そみて法を源

氏とまひけつり幕本巻よなまづーがや一此

らあいてすれなめん女まんとう新法へ

あやまら一えん人のくくみなら名ともた

ていじきのんとまじきけ理を知らぬ余

のゆきひてまらあつとまのい忽は災とあり

まもりや一きも智者も愚者もまけ好まこま

ひ理を失ひゆくかにあくく福は煮て用ひ

せねゆへちりとあるのこ也

ふーんうせまされあけくよされとお活を度

現心や原氏とゆくのゆせ悦惚とまり新也

楚項羽の力抜山一もの勇士も虞氏とかん

涙とやぐ一万のよきを悪かつき源氏も好色を
中らと失流へり人前だんの才一乃ちうしの源みなを
見けん感かん思し感かんの二や

世やほきぬらん 世やつもあふんと樹下集ふりかきし

何とぞり一涙のゆり成ゆ世やはまおん何やいぬ

何とぞり一涙のゆり成ゆ世やはまおん何やいぬ
がさるれがまう一きよめつういふうの流いのづれて

あふしもぬゆ

あふり一とみりとり互たひ子んくう一源氏のは

あつ子も何の中なりと云何うたあつと云何程よむ

き密通せ一先赦と悔あつてあつと云何源氏を

あひ流へた義理とあひく一て悪どあつと云何

あふりつり流よひるま叶アリ

曲礼曰欲不可從志不可滿云 麴まがら目め教をるまるまるま

のつ一みまきゆへは源氏の災とあまら

あふりつり流よひるま叶アリ

あふりつり流よひるま叶アリ

あふりつり流よひるま叶アリ

あふりつり流よひるま叶アリ

子立くんとせしとていせし天下の父子礼義
 とひんよと恐る時後良が謀りて高祖に由り
 一高山の穴能と惠帝は侍せしめ明せしむ
 高祖云惠帝羽翼已成とて太子を立りゆり
 とやあはれり穴能と東園云濟里李夏黄云
 舟里先せこの人せ高祖みづり淮南の
 黥布と討せり時子流矢所中未央宮の裏に
 崩し給へり惠帝は即て呂后むしらせり
 史記曰呂后怨戚夫人其子趙王囚戚夫人断手
 足去眼輝耳飲瘡藥使居廁中命曰人彘云

人彘ト人畜生ト云心也。桐壺帝ハ高祖。惠后ハ
 呂太后。朱萑院ハ惠帝。藤壺中宮ハ戚夫人。
 冷泉院ハ趙王如意ヲ諭て之ハ給へりかくて尼子
 あり源氏とてなれて力をつゝ一と給へりゆへ一
 中平安あり
 乃乃とて毛詩曰白圭玷尚可磨此言之玷不
 可愈云源氏ハ似給へりを班子とて也
 紅雲やうく多つき 古今五林下雲林院の本
 乃陰よとすみてよみな 僧正遍昭
 院人のつぎくをよぶこののむ法をくむ事なり

秋乃野のついであまめいさる

古今十九雜辨

僧正遍昭

秋の野おひまめいさる世即花ある海花のついで

う紀人ト一りぞせ

天乃戸と一りぞこの目みまきま一人りぞありけり

念佛衆生 観經曰光明遍照十方世界念佛衆

生攝取不捨

念佛衆生とて落りけし月宿りぬん

いりりれぬんや 世と観經の中んのかうに

いりてまねくきざすもももや妄執のまう

を我ありて落りていひけり六塵の身一

色欲ある身をいひ

落りせの落り宿りに君をまて

例ありぬんかめりありていりていりていり

日と東門院中文と申す時つらう

一條院中

落りせの落り宿りに君をまて塵をいりて

けすのよるとそのまゝいり

むしと今よ

右の懸のまゝ巻らう一昔と今よあま

さういふおん地のもうよ

やうく人を抱ふもつあや世中をかりあぐの秋もとるん

ゆふだまき

師云 本綿と付る手續し

ふあつとあそろーや

師云 神職よそわりのゆふと恐れ

あがらまこーき又つらとあけ悪とあまう人

とら悪とすらすのしりててびい力の災とあわ

る理と磨つかりてとあつと増長するもそ

祓うあーうあがさういぬせのこくらー記ぞー

わりあーあがさういぬせのこくらー年比いので

りたすいぬせ

師云

け河原氏のくせとらいて人の戒とせり去年の

安文のぬらざうよまをよんぞつらーとい安文は

んぞつらーつらびがみふらのまにさきとせ祓を

とらあーいぬせとらいも成あま年比い大うい

て神職よ定りてとらとつらー流い人あらい

とらとあけ万う人といぬ理ととむき力をとる

しむら申いぬ色散と付くとと

すうーあいまれもあうー

師云 安文よかり流い

流文へぬぬあどあうぬおあぬふと評判也

畢竟道理とせいとまのつべきのをーし

黒き巾車

至徳記云服者の乗車之板車と云

板より黒なりと云

錦くらり

古今抄下巻子に錦くらり云

くらりよあり

貫之

見らるる人ありて散らるる奥山の紅葉より乃錦くらり

ありて散らるる地一帯の人の中よりありて

ありて散らるる地一帯の人の中よりありて

ありて散らるる地一帯の人の中よりありて

ありて散らるる地一帯の人の中よりありて

ありて散らるる地一帯の人の中よりありて

ゆくりありて

あごやり 婀娜と半婀娜と同一義負也又柔也

今とてあごやりとありてゆくりありて

ありて 花宴巻に朱藤流の東交の時

まわり流し流しに流しに密通と云ふ流し

ありて流しの柔ありて

ありて流しの柔ありて

ありて流しの柔ありて

白虹目とつらぬり

漢書曰荊軻慕燕丹之義欲刺秦皇其精誠上感

於天乃白虹貫日太子畏之云虹雄也鮮二盛也
蜺八雌也閭也地氣が上タル也天地ノ燔氣ナレハ君
子ハ指サヌトアリ。天子云何事也白虹日をつ
ぬらんとしてえんをうすす太子丹が志すげん
と望れんとす也漢氏の朱蓬院をたす冷泉院
の代せんとのん成す紀のん漢氏を刺刺と
朱蓬院を秦始と東宮と燕太子丹子
以てつる。朝虹のぬらりて食時を必ぬあつた
虹東よりのぬらりの日を貫く實よす
史記燕世家曰太子丹質於秦亡歸燕二十五年

秦虜滅韓王安置潁川郡二十七年秦虜趙王遷
滅趙々公子嘉自立為代王燕見且滅六國秦兵
臨易水禍迫至燕太子丹陰養壯士二十人使荆
軻獻督元地圖於秦因襲刺秦王秦王覺殺軻使
將軍王翦擊燕
綱鑑全書曰燕太子丹質於秦秦王遇之無礼欲
求歸秦王曰烏頭白馬生角乃許爾歸丹仰天而
嘆烏頭白馬生角乃飯呂氏春秋
宋文粹曰史記烏頭白馬角梯橋不進金擲龜聽
琴姬等事皆不被載遷司馬迂削而去之理或然

也烏頭白ト馬角トノ瑞アレト太子丹ヲ秦王カハセ
故ニ逃去ヲ追手ノ人々橋板ヲフミハツレ落ヤウニシ
タリ案ノ如ク落所ヲ亀ガ負テ渡ル其時フトコ巨
金五百兩アリシヲ亀ノ甲ニ置テトラセ恩ヲ歸シタ
ルト云サレト實否ヲシラヌトテ史記ニ司馬遷ノセズレテ
注ニシタリ

史記列傳二十六日荊軻者衛人也其先乃齊人
從於衛衛人謂之慶卿而之燕燕人謂之荊軻
秦王見燕使者咸陽宮荊軻奉樊於期頭函而秦
舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色變振恐群

臣怪之荊軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷鄙人未
嘗見天子故振懼願大王少假借使得畢事於前
秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖而奏之
秦王發圖々窮而匕首見因左手把秦王之袖而
右手持匕首揜未至身秦王驚自引而起袖絕拔
劍々長操其室

注曰秦王曰今日之事從子計耳乞聽琴而死
召姬人鼓琴々々色曰羅縠單衣可裂而絶八尺
屏風可超而越鹿盧之劍可負而拔王於是奮
袖超屏風走之云荊軻此ニテウタレ又太子丹

行水ト云處ニテ秦王殺之秦舞陽が死スル處ハ
 不考之云秦舞陽ハ劊使ト成テ行多十三歳
 トキ殺人手カラレタル者ナル故ニツレテ行タレ
 臆病ニ成テ振ヒ恐タリ。懼徒頼反懼也假借ト
 ナツカシキ事也。匕首ト一尺八寸劊首似ヒナリ
 堪擦也操把持也樊於期代太子丹頭ヲ始皇ニ
 ツカハス始皇ノ心ニコト、レ安心セリ

時惶忽劊堅故不可立拔荆軻遂秦王環柱而走
 群臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法群臣侍殿
 上者不得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非

有詔召不得上方急時不及召下兵以故荆軻乃
 逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時
 侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也秦王方環
 柱走卒惶急不知所為左右乃曰王負劊負劊遂
 拔以擊荆軻斷其左股荆軻廢乃引其匕首以擗
 秦王不中々桐柱秦王復擊軻々被八創軻自知
 事不就倚柱而笑箕踞以罵曰事所以不成者以
 欲生劫之必得約契報太子也於是左右既前殺
 軻云搏手擊也提挈也
 梨花編ト云唐ノ書四卷アリコノ中ニ云

馬角生久 羈外境得歸 燕太子丹為質於秦質音

求歸秦王曰待烏頭白馬生角當放汝歸秦王欲

太子仰天慟哭烏頭白馬角生秦王

大驚乃遣歸

辰の辰けしきふりてつらうしきふりてつらうしきふり

のこすゆると

帝の母悪辰のまに世の政ありて故よる

しきとふ

毛詩十八贍仰篇婦有長舌維厲之階云 舌ノ短キ

モノハ元物ライハス。長舌ト云ハ詞ノ多ヲ云叔尊ヲ廣

長舌ト云ハ鼻ノ上迄トキタル也昔ヨリ女ノ世務

サレ出ル邪路ニテ国家ノ災トナル也

毛詩十八同篇哲夫成城哲婦傾城云 哲ハ知也知

アル大丈夫ハ国ヲ成トハ国ヲヨク治ムル也城ハ国ノ心

也知アル女ハ国ヲ破ル女ノ言ヲ用レハ廢姒カ言ニヨ

リ幽王天下ヲ乱レタル如シ

あつたのら 内裏よ詠ら河之内垣あり

あつたあり

りすこも人乃

山橋見よゆりてふりてふりてふりてふりてふりてふり

心ミの鬼カミ 師云 我オレ子コ誤アヤりあれ人ヒトを恐おそうと云いふ
 心ココロと理リのまますれば世セとよわをううりあはれ
 やし君子クニノミの心ココロ也

男ヲの心ココロの心ココロ 心
 心ココロの心ココロの心ココロ 心
 心ココロの心ココロの心ココロ 心

心ミハハクク 心
 心ココロの心ココロの心ココロ 心

元亨ノ釋書ノ曰釋シヤク勒操リキサウ和州人ノ父母無ク子母ノ夢明星ノ
 入ニ懷ニ娠ニ師トシ大安寺ノ信ニ灵ニ後ニ就シ善議ノ法師ノ學ニ三論ノ後ニ

管東大寺幹事又主西寺幹事初居大安寺隣房
 有榮好養老母於寺側一童為役昔七大寺不騰
 庫煙廡院備飯到午時駕車入寺巡僧坊行之每
 入四外好死次年母勸絶擇共同志七人葬好母
 石淵寺後八人僧四日二座講席設名法華八講
 會延曆十五年也每歲不缺諸寺名曰石淵八講
 相効後天長四年五月七日終西寺北院年七十
 心ココロ忌イヒ日ヒ 帝乃心忌日と御國忌と云也又年中
 心ココロ忌イヒ日ヒ 帝乃心忌日と御國忌と云也又年中
 心ココロ忌イヒ日ヒ 帝乃心忌日と御國忌と云也又年中

水國志也

五卷乃日 雙 四日二座也 一日子二卷了也 五卷

乃日ハ才三日也 六位薪と水とを添て新道あり

云家門口より捧物あり 金の打枝子念珠等華

慢即そひくまけて庭上の机子玉を着座の云

卿法事の儒ら消よりかりて捧物をめらて

新道あり

法花道をわらふハ薪より柔摘水汲て

こやうごう 佛前の焼香と名香と号と

火このうなつけていふ人たつて世とそひまらる

百歳乃らのと常子忘くそ雲の心まき六位

い今敵山乃横川よありわてふありけ敷なり

肉宴 正月廿一日也 肉之乃節會也 仁壽殿子

てわらふ人ともを延と給より作て水前

海すら也 今絶より 事根津抄

のそひま 白馬節會正月七日也 ありに白き

ののいもくもゆらゆらとまらむじく引領中宮

也 十節録曰正月七日看白馬之牲以百為

本天有白龍地有白馬是日見白馬即年中邪氣

遠去不来也 云

三十一の柳乃

河カハ岸カサ密ミ通トウ臘ラク將シヤウ舒シュ柳リウ

山意サンイ衝寒シュウカン欲ヨク放フツ梅バイ 社甫

柳リウハ非常ヒョウジョウ多タクシテ三サンもムムあり風カゼハ清セイテ乳ニと知チ故コ

子シ人ジン柳リウとトハ漢カン武帝フイ園エン中チュウ蔣シヤウ人ジン柳リウ一イチ日ニツ之シ眠メン之シ

起キとトハハリ

むべもムありヤ

後撰十五西院サイエンの后キミ内ウチがガあり

させ給タマハてとトカカもモさせ給タマハひヒくらクラ時トキがガ院イン乃ノ申ウケ給タマの

松マツとトまマづづりりて申ウケ付ツけりりくらくら素ソ性セイ法師ホウシ

とトハハ松マツとトハ今イマ日ニツををムムららむむももムムありありああままむむ位イなり

西院サイエンとトハハ十ジュウ三サン代ダイ淳ジュン和ワ天テン皇クワン也ヤ后キミハハ子シとトハハムム十二

代ダイ淳ジュン和ワ皇クワン也ヤ

つとめ一の代

京官キョウカン淳目ジュンメハ三月サンゲツのノ事コト也ヤ

不事フコト根源ゲンゲン云クニ今イマ秋アキのノ淳目ジュンメとトハハ子シ冬フユにもニモ及キ也ヤ

京キョウハハ何ナニもモ淳目ジュンメとトハハ仁ニせセららむむ中ナカ人ヒトハハ京官キョウカンとトハハ也ヤ

八月ハチゲツ十日ジュウニチ定考テイコウのノ事コト也ヤ加カららむむとトハハ下シモとトハハ上ウヘとトハハ也ヤ

名目ナメ也ヤ六位ロクイ以上イジョウのノ加階カカエ也ヤ實枝ジツエ云クニ比ヒとトハハ子シ冬フユにもニモ及キ也ヤ

八月ハチゲツのノ事コトとトハハ三サンにニハハいいふふ次ジのノ詞コトバハハ夜ヨのノ目メとトハハ

ありありいいふふ事コト也ヤ目メとトハハ申ウケされればば理連リレンよりヨリもモ人ヒト一イチ

又マタ春ハル乃ノ時トキもモ京官キョウカンがガりりとトハハ目メとトハハ子シ冬フユにもニモ及キ也ヤ

皇表スミタラシメのノ淳目ジュンメとトハハ目メとトハハ子シ冬フユにもニモ及キ也ヤ

御後

御後也之官の年官年爵封戸

位由あり院春宮と大臣内大臣納言左衛門

あり拾芥抄子妻内治と之官の諸國の掾

二人目之人ありあり年子奏聞とへどして

官位よりさるへきの勅と年官年爵とつて

みふ 御封と封戸也中宮春宮がら千五百

戸也千五百家也氏戸とせらるるも一

らしへのりもの

御後之表七十のころもろりあれ九世中

多しがさしてのり也け時中九歳入遷漂卷

源氏廿六の時致事の時々の年六十とあり今

源氏廿六の家也礼記に致事と本より同一也

花鳥云た大臣の致事の例いた大臣藤良世五十九

代字多の寛平八年十二月廿九日上表致仕七十

四歳の時也又六十三代冷泉院の安和二年正月廿

五政大臣藤實頼清慎上表致仕七十歳同八月十三

日よ六十代園融院受禪の時撰改し治と例

とて川入の大臣もけ卷子致仕して遷漂卷も冷泉

院受禪の時撰改し治と例とて七十より致仕

の表とて治とやめ治より車とも先祖の廟

よりくら故に七十と懸車の齡ともいふ也細流
も懸車年とあり實枝同定
禮記曲礼上大夫七十

而致事カスコトヲ注カス致其掌所事於君而告キミニツケテオモラフモ若不得謝則シテエテオラフ
賜タラキキキテ杖云几云八脇息ノ事也杖也

けふひのつこさめ

實枝云春も末官づり沙汰ありとみけりよや

五秋のみと徑

季の沖瀆シノドとて二八月も禁中

まて定りてあるもや今夏ハ源氏の所もてシノド

流シノド也細流シノドも私の所もて二季の沖瀆シノドはひ

くら例未考タラキキ

こ海よりよこのつせ流へり

細取シノド 仙源抄

河海云た名よりれこ世をぬきとりて番ツボ也

至徳記云あるこあるこ一人つからちやあひす

りけとこ海よりとよ

かけのれ

賭カ

正月十八日賭カうとよもかけ

抱乃あるとよみん

るのれとれさうび

青表紙アヲもさうびんとあり

朗詠朗首夏首の題題とて白樂天

甕頭ウヱ竹竹夏夏経経春春熟熟

階底カ薔薇薔入入夏夏用用

流流云云薔薇薔正正用用春春酒酒初初熟熟云云甕甕とと酒酒籠籠也也

竹葉と酒の一滴もその酒は春より夏よりま
て玉也 山蒼公云け清くひの町にさうじん
ともひてさうじん

古今十物石 ころび 貫之

我けさうじんは凡のたの文と何ぞら物とさうじん

高砂と出でさうじん 懼馬樂 津 高砂

高砂の少砂乃高砂乃 砂ツモリテ山トナル心也

尾上子にけさう白玉橋玉柳

高砂 高砂の少砂乃高砂乃 高砂 尾上子にけさう白玉橋玉柳

祈り清み草乃みきけせん玉柳 子リキ草サミ布也草ハ草也ニヤミラカケ衣架也

何よーのさうじん。おまーのさうじん。 ナニ、何ヲヤ

心もまーのさうじん。百合花のさうじん。 ミタハ待也

けさうじん初花子何ん海一物とさうじん。 高砂

家子と網吸さうじん。 高砂

網とあり入夏守をい合てさうじん。 高砂

何ん海一物とさうじん。

花と紫と赤とさうじん。 高砂

文主乃子武王のさうじん。

史記魯世家曰於是宰相成王而使子伯禽代
就封於魯周公戒伯禽曰我文王之子武王之弟

成主之叔父也於天下亦不賤矣然我一沐三投
髮一飯三吐哺起以待士猶恐失天下之賢人子
之魯慎無以國驕人

母まへりにかざりく〜うありて

け初六月夕立のやうやいとけ次花散里巻又

月のゆるれい家も五月とんごへ〜五月に

け系氣何らへきさるや

うらくよせい〜 實枝云うんの君きみ教訓せん

とや右大臣のつら娘の名をけり〜さうりてや

このついでよあへきさるや 一 江戸た近せのよや

柳やなぎの

空蟬あそ巻よ浮うる翁おきなが妻つまよ思おもひ入いてかかり〜子花女

みんけられ既すでに大おほきとああんやせ〜と不思ふし儀ぎ子

誰たれとのれ〜ままぢぢひて花はな宴えんよ弘ひろ徽き殿てんのわを

敵たかめて女むすめ沛はいの妹いもうと六むつ君きみとさへ契ちぎとら〜右大臣の

夜宴よるえんの時とき〜解と〜て几帳きちょうがよままとさへ

まみら〜たみよ人ひと目めも〜〜ぬ好色このしきやい美みま

世よの〜らり本ほん柝たけの頃ころよつけつ結むす〜ままの〜りよ

みけ今いま又また父ちち右大臣の承うけり〜らよ源氏げんじを

思おもひ入いる交まじ會あひ〜右大臣みぎのちみよ思おもひけられけり〜り

の昔むかし思おもひ初はじめりすりなるが籠かごとまりて次つぎ弟あによ長なが大

まあやし天道の寒暑を自れも暑きり又さる
 ころと次第は冷気が大寒とあやし汐の満ちも
 大汐十日の百かつみらまきりお目めよ大よみら
 らや六日めうさるく喊して五日とてお汐や
 あら頂ごへのわり極きいもやひうこさるや小汐
 のころもあしよさるくくと減しゆくもや人のと
 もあしやしお意のよづらる夜い罪なきにきい
 て次第よつりて又意とさるやしえれい地之初
 とくつーと吾道へのけい次第に増進する意
 久くゆげい又次第は増意して勢とわりがー

笑とさるや源氏十六葉より好色のくせ付
 をめ今ぬきめよほくられて笑とさるや世界
 の道理とまて教戒とせり

花散里

奇とて巻なと守源氏廿七葉のみ月乃の如
翠うこの世よつげし 代りり時とくまひ

流るる如

大納乃也なかりてくまひて

天^雲下と治^治りにいやりめと春^春ふと才^才山とく流^流連
詩^詩道十一鴻雁篇曰^曰及^及於^於人^人哀^哀此^此鰥^鰥寡^寡
侯^侯伯^伯卿^卿士^士が勅^勅令^令るの如^如くもや 天^天下^下と治^治
まの鰥^鰥寡^寡孤^孤獨^獨のや乃^乃者^者窮^窮してら付^付ふるまを飛
一^一にめくこ^こ期^期一^一財^財寶^寶とらう世^世籠^籠とらうすは

世の衣のくまひまよひ出流よ

榮花の盛よあひやりか—今艱難よあそ

あひやりあそより王稚川が官位よて外國よ香

て富貴よて旨くら家よ居て古郷よ九十よあ

まり母よとてて田妻もあよりつあよ人よもやと

益堂玉胤崇雲卿 石及桃源歎乃歌

と作より桃源の徳居のくく仙境のゆや歎乃ハ

舟歎や榮花よりより悦よるよとあそぬといふ

山峯の和顔よ

慈母あはれ鳥鶴喜 故人無賦續慶歎

九十にあまの母い鳥人母とや—多し恩を詠ら

りよ王稚川が立身いすらのつり養りんと行へ—

家人よと貪らつ時つれ—妻の官位よあ立時薪く

て門の関乃本とわりてくひ物よとてくらせされ丸

足控て父の者信もせぬと歎べ—と作より。慶

慶の物あひ百里奚が羊の皮よ才と鬻んで秦よ

はる時妻。貪家たれい袖てぬる鶏ところりて慶

と薪とせ—よ秦乃大吏とよりて回好と忘—と

恨て妻が歎てい—

百里奚立羊皮憶別時享依唯歎慶慶

うくぢらうととを何つまたらうへて

うくぢらうあづまじとと潤てとらふやあづまじ

まへまらやまらに通てまらや

まららに

とて糸と針の糸を質は

は糸よりらうらうとて葉と枝とをわらうらうて

のらや— 夢えが

時多い木州神と啼ゆへ水車と— 人さき

時多— ことよき人のそれなれ

時鳥啼くまきけいほりまきくわらうらうらうらうらう

らくく— 垣根も

花散— 庭の積をありはひて— 垣根えん

不審抄出云惟光のゆき乃は交よれらうとみま

深氏へいんからうらうら女ごとを以て惟光もたどり

らう白— 極— 垣根もそれたんえずらう

まらぶとつひ推らう洞也

虫せら 十一月中旬日め節舞姫みん人

甲子代天武天皇吉野のまら— 酒と時琴と

あひ— 前乃嶺より天女何まらり被とみ

ひ離— ころとらうせらや— 甲子代を氏天皇

天平十三年に内裏にてみ節舞あり

也 五事極添枚委

いんちりてり

行字人 女乃しはくくへはひるいんちりてり少はふふはななく

はら花のうをかくむしと時き 奥入下字 柳乃香とありしと時きかくしひつあぬ日かき

万 柳の花散里まがうひるぶ山時きとよ海せんりも

河海は柳は常世末まつらうしつらありハ雲披ま

常世りのま 去二集 常世よりかくのみの実と後植て山時き時き

あよあしを

あよあしをいんちりてり少はふふはななく

あよあしをいんちりてり少はふふはななく



